

## 二重橋

にじゅうばし

東京名所のひとつ皇居前広場。市民の広場といえるものの少ない東京で、四季色美しい松の緑、濠・石垣に縁取られたこの広場は貴重な存在で、日本でも誇るべき広場である。

二重橋はその中でのポイントとして、皇居正門入口にふさわしく、神々しいとまでいえるたたずまいを見せている。広場から橋を見ると、手前に2径間の石造アーチ橋、その奥に鉄のアーチ橋が重なって見える。これをもって二重の橋、二重橋という名であると巷間ややもすると伝えられるが、正式名称は、鉄橋は皇居正門鉄橋、手前の橋は皇居正門石橋と現在は名づけられている。そのうち二重橋というのは、奥にある鉄橋のことである。

長祿元年（1457）太田道灌が江戸に居城を構え、天正18年（1590）徳川家康がここを居城として以来400年、江戸から東京へと日本の中心としてこの地は整えられ発展してきた。

二重橋の創架はいつか明らかではないが、文政12年（1829）の記録では、「西丸は御当家にて新たに御取立てありしゆえ最初より御門の橋とて美をつくして造らせ玉ひしと見え二重橋の葱花子銘に慶長19年（1614）甲寅8月吉日御大工椎名伊与と鐫り云々」とあり、その頃の創建と考えられている。江戸城西の丸下乗橋といわれ、擬宝珠付きの高欄、幅22尺、長さ96尺の木橋であった。高欄の擬宝珠には元禄13年（1700）8月に架替の旨の追刻があり、文化6年（1809）4月にも架け替えられたという記録もある。当時の木橋は上下二層が連結されており、その両方とも通れたという。これが二重橋の名前の由来である。

明治に入り新たな皇居造営にあたり、鉄橋をもって架け替えることとなった。明治19年（1886）10月に着工、21年10月14日に竣工した。石造アーチ橋はそれより早く、19年4月に着工、翌年12月に竣工している。鉄橋の設計は当時日本に在住していたドイツ人ウイヘルム・ハルゼー、製作は同じくドイツのハーコート社、架設は横浜に在住していたオランダ人ストルネ・ブリンクであった。

文明開化、富国強兵の策から、昭和20年8月15日の悲痛な二重橋前の叫び、広場を吹き荒れたデモの波から日本の復興までを見つめ、昭和34年4月10日歓喜に沸く皇太子ご成婚の馬車をおくったこの橋も、時代に応ずる設計強度の不足、錬鉄を用いた橋体の老朽化、基礎耐力の不足等から架け替えの議がおこった。

新橋の構造設計は、平井敦東京大学教授指導の下に行なわれた。その形状、趣は旧橋のそれを引き継いだが、基礎工はケーソン、橋体形式は3ヒンジアーチから2ヒンジに、その材料は錬鉄から耐候性鋼、部材集成はリベットから溶接、アーチを継ぐ現場継手は打込式テーパースポルトから高力ボルト摩擦接合と、新しい橋梁技術によっている。

橋灯・高欄・橋の側面を飾る龍のパネル等の意匠設計は、イメージは旧橋のそれを保存しつつ、内藤春治東京芸術大学名誉教授指導の下に、装いを新たに設計・製作された。

改築工事は昭和38年（1963）5月10日に起工式、翌年5月28日に竣工式がとり行なわれた。日本の行く末を、その中心にあってこの橋も長く見つめていくことになる。〔TJ〕

竣工年月：昭和38年（1963）5月28日

所在地：東京都千代田区

河川名：二重橋濠

橋長・幅員：25.5m×10.0m（車道8.0m+歩道2×1.0m）

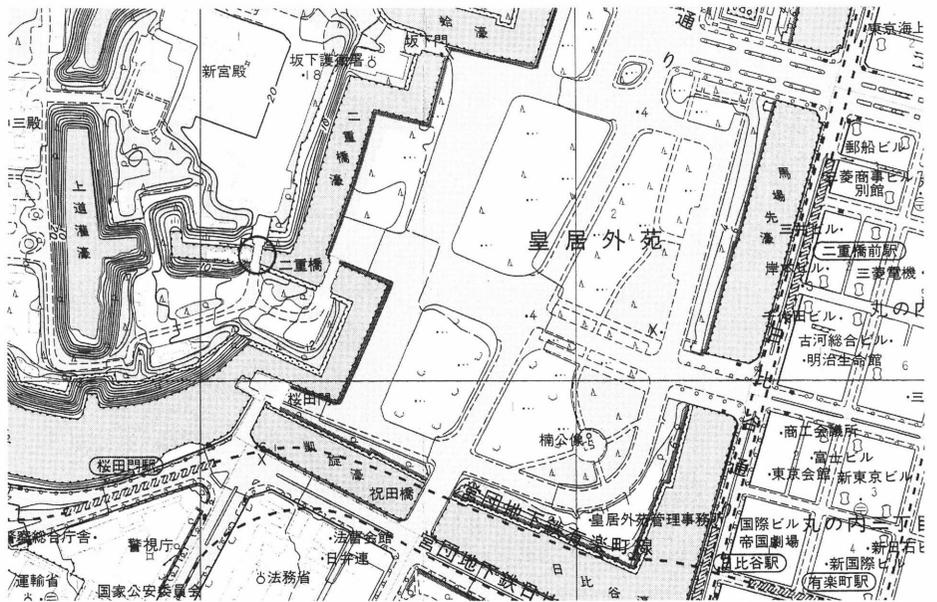
径間数・支間長：1×24.44m

形式：上路ローゼ



雪の朝の二重橋

〈1994年1月29日，撮影・田島二郎〉



(1:10,000 日本橋)